

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 宮本 佳和

【所属】(助成決定時) 国立民族学博物館

【研究題目】 ナミビア牧畜民の祖先観念と場所の賛美詩に関する人類学的研究

【研究の目的】(400字程度)

近年のアフリカ諸国では、土地改革によって定住化政策が推進されており、牧畜民が生業を営む放牧地の多くが農地などに変えられている。こうした状況の中で遊動民による先住権をめぐる運動が人権保護団体などの外部アクターを巻き込みながら活発化している。南部アフリカのナミビア共和国においては、1990年代から水力発電ダムの建設をめぐる反対運動が国際的に展開されてきた。建設は一時的に中止され、先住民である牧畜民の権利が認められたが、その後、予定地を変更して2022年現在も計画が進められている。反対運動において強調されていたのは、祖先が眠る墓と土地との関係である。当時の民族誌も彼らにとって墓が重要であることを主張してきた。しかし初期の公聴会において人々が特定の場所とのつながりの根拠にしていたのは、口承詩の一つである場所の賛美詩であった。本研究では、ダム建設予定地域に暮らす牧畜民の口承詩と特定の場所への帰属意識に着目し、人々と土地との関係を再考するとともに、問題を再解釈することによって近代国家が土地改革を進めるうえで直面している先住権を考察することを目的とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

この目的を遂行するために、反対運動において地域の代表者とされる首長などの伝統的権威と、実際に生活をする人々の場所の捉え方の差異に着目した。一般に先住権問題においては、当該地域の人々を置き去りにしたまま地域の代表とされる人物が議論を進め、その場所で暮らすローカルの人々の声は捨象される傾向にあるためである。

本研究は、フィールド調査に根ざした実証的な研究である。そのため参与観察と聞き取りにもとづくフィールド調査に重点を置く。調査地域はナミビア共和国のクネネ県エプパ選挙区およびオプウォ地方／都市選挙区(カオコランド)である。主なインフォーマントは、牧畜民ヒンバ及びヘレロの中でも、ダム建設予定地をかつての居住地と主張する人々および放牧地として利用する人々である。また、反対運動の中心となっている首長およびその親族が伝統的権威の党派の一つであるカピカ派を形成しているため、彼らへの聞き取りも同様に実施した。ヒンバ及びヘレロ社会において詩人のような職能者はいないとされているため、聞き取りを進める中で朗詠が得意な者の社会的な役割や属性を検討した。一方、彼らの社会には政治的文脈において登場することの多い「歴史を語る者」がいるため、彼らの朗詠する(朗詠した)賛美詩および口頭伝承とその社会・政治的背景、そして彼らの属性および伝統的権威との関係を分析した。文献調査においては、口承詩に関する文献の収集をはじめ、ダム建設問題に関する公文書や報告書等を収集、整理、検討した。特に、国際的な反対運動が活発におこなわれていた1990年代半ばから2000年代前半の報道や公文書、関連文献を収集し、先住権の根拠として示されていた賛美詩がどのタイミングで墓へと変化したのかを検討した。

【結論・考察】(400字程度)

結果として、カオコランドにおいて伝統的権威を抜きに人々と土地との関係を考えることができないことが改めて明らかになった。伝統的権威は地域の親族関係の網の目の一部を構成しており、ダム建設反対運動の際に賛美詩を朗詠していた人たちの多くは伝統的権威の関係者、あるいはそうでなくとも親族関係上、彼らに影響を与える人物だった。建設が計画された当時は、ナミビアは南アフリカのアパルトヘイト体制から独立した直後であり、先住権問題が国際的に取り上げられていた時期である。カオコランド内部においても、

誰が地域の代表者としてふさわしいか、植民地期に創造された首長らが自身の正統性をめぐり争っていた。こうした背景を踏まえると、土地とのつながりを系譜で示すことのできる墓を用いて主張することは、自らの正統性を示す手段として利用しやすかったという見方もできよう。一方、彼らの賛美詩の特徴は、その地域の者でも容易に理解できない複雑で長い詩にある。即興的に次々と付け加えられていく詩は、場所の景観や故人の特徴だけでなく、特定の出来事や状況について、複数の作者がそれぞれの感性で形容するため動的な側面をもつ。インフォーマントの一人が述べたように、こうした賛美詩を朗詠して場所とのつながりを主張しても政府関係者に理解してもらえないため、わかりやすい墓を根拠にするようになったと考えられる。

以上が報告時点での暫定的な結論と考察である。今後は賛美詩の豊かな表現の中で言及される祖先と場所との関係について翻訳をすすめ、これまで取りこぼされてきたヒンバとヘレロの詩的世界を描き出していくとともに、議論が活発にされていた当時の共時的な状況だけでなく、通時的な変化を含めて問題を再解釈し、分析と考察を深める予定である。

最後に、本研究をご支援くださり研究遂行を可能にしてくださった松下幸之助記念志財団のみなさま、そして本研究に携わってくださったみなさまに、この場をかりて心より厚くお礼申し上げます。